

細則様式第4号

論文審査及び最終試験結果報告書			
氏名	小田桐 伶		
入学年度	平成 30 年度	学籍番号	18GG902
領域	総合リハビリテーション 科学領域	分野	
審査委員	主査	高見 彰淑	
	副査	牧野 美里	
	副査	門前 暁	
	副査	吉田 英樹	

論文題目： 注意焦点の違いが動作に及ぼす影響に関する研究

審査結果要旨：

本研究は、脳卒中患者にリハビリテーション介入をする際の教示の仕方について、注意の焦点の当て方、すなわち、自己身体に注意を向ける「Internal Focus (以下、IF)」と外部環境に注意を向ける「External Focus (以下、EF)」に着目し検討を加えた研究である。第1段階では、健常例で上記二つの注意による教示が及ぼす影響を検討した結果、EFにおいて動作の正確性向上や注意機能の中枢でもある前頭前野の賦活が認められた。第2段階と第3段階では、立ち上がり動作について調査し、「お辞儀をして立ち上がる」という教示と通常の「立ってください」という教示の違いで、パフォーマンスや注意焦点が変化するのか、健常例ならびに脳卒中患者で比較検討した。その結果、両者ともに「お辞儀をして立ち上がる」という教示において、体幹傾斜を促すことには成功はするものの、動作効率は低下し、注意の状況では意識的運動処理や運動自己意識が高くなる傾向を見出した。第4段階では、これらの結果を踏まえ、教示の影響を受けやすい脳卒中患者としてバランス機能が低く認知機能が高い場合はIFになりやすいことを見出した。これらの結果は新知見を多く含んでおり、リハビリテーション介入戦略を検討する上で大いに貢献し得るものである。

学位審査論文及び学位審査会において、申請者は本研究の意義、結果に対する解釈に関して多数の先行研究をレビューしながら示し、質疑応答においても研究の限界や今後の展望なども含めて的確に回答していたことから、自身の研究内容について十分に理解していることが確認された。また、本研究は適切な倫理的手続きに基づいて遂行されており、計画・実施・データ収集・解析等の過程において申請者は独立した研究者として高い研究遂行能力を有するとともに、高い倫理観を身につけていることが確認された。以上から、申請された学位審査論文は博士の学位に資すると判断した。

最終試験 令和 5 年 1 月 26 日

試験の結果は 合格 ・ 不合格 と判定する。

(以下、被ばく医療コース選択者についてのみ記入)

論文のテーマは、放射線に関連した内容であると 認められる ・ 認められない 。